

『中国新出土文献の思想史的研究：  
故事・教訓書を中心として』

草野友子\*著、汲古書院、2022年

大形 徹†

本書は中国の新出土文献の中から、とくに故事・教訓書に焦点をあてて考察した力作である。近年、新出土文献は陸続と公刊され、それに対する論考もかなりの量にのぼる。また一部が公刊されているものの、続編にあたる部分がまだ世に出ていないものもある。この書の中でも未公刊の部分に重要な部分があるのではないかといった記述がみえる。その意味で、本書は最新の論考でありながら、将来、内容を書き足す余地のある現在進行形の論考であるともいえる。

タイトルと副題だけでは、内容がわからないため、目次から摘録することで、全体の内容を紹介したい。まず、大きく三部に分かれる。第一部「楚国故事の研究」、第二部「故事類文献の研究——魯・齊・晋——」、第三部「新出土文献から見る教訓書」である。

一と二は国別の考察である。春秋戦国時代の諸国の話ということになる。楚の話だけで第一部を構成しているのは、そもそも出土文献に楚文字で書かれたものが圧倒的に多いということによる。「故事」といえば故事成語であり、教訓的なものが多い。それは跡継ぎの太子などに教えるためであったようだ。その角度から故事をとらえ、また教訓書とされたものもあわせて考察している。

「第一部 楚国故事の研究」の内容は上海博物館所蔵楚簡の研究である。第一章『成王為城濮之行』、第二章『申公臣靈王』、第三章『邦人不称』、第四章『命』、第五章『陳公治兵』、第六章『東大王泊旱』について、それぞれ基礎情報、釈読を加えている。さらに内容を検討し、思想的特質をさぐり、場合によっては竹簡排列を再検討している。

第二章のまとめとして「『申公臣靈王』も、『左伝』と対照させることによって、その全体構造を明らかにした。そして、本篇の前半は、楚の靈王と穿封戌に関する事柄について、極めて簡潔に記されている一方、後半には、伝世文献には見られない靈王と穿封戌との問答が記されており、本篇は靈王と穿封戌の関係を映し出す、重要な資料であることを指摘した」（466頁）と記される。

この記述によって出土文献の面白さが十二分にわかる。つまり、伝世文献である『左伝』と対比でき、かつまた伝世文献には見られない内容が含まれるというのである。『左伝』だけでは、わかり得なかったことの一端が明らかになったのである。

第六章では「これらの楚王に関する文献は、いずれも楚の人によって書かれたものであり、「語」す

---

\* 立命館大学衣笠総合研究機構客員研究員

† 立命館大学衣笠総合研究機構教授、白川静記念東洋文字文化研究所  
ohgata72@fc.ritsumei.ac.jp

なわち太子教育のテキストの一種であったと考えられるのである。ただし、『東大王泊早』については、他の楚国故事とも関連づけると、必ずしも太子教育のためだけに執筆されたものではないと考えられる。本篇で登場する臣下は、君主を諫め、正しい方向に導く役割を担っている。つまり、王を補佐すべき立場としての規範が示され、その読者対象としては、王族貴族の子弟も想定されていると考えられるのである」（237頁）と記される。

このあたりの記述で、故事や教訓書というのが、本来、どういった人たちをターゲットにして著されたのかということがよくわかる。

「第二部 故事類文献の研究——魯・斉・晋——」も同様に上海博物館所蔵楚簡の魯・斉・晋等の国に関わるものである。第一章『魯邦大旱』、第二章『競建内之』『鮑叔牙与隰朋之諫』、第三章『姑成家父』について、第一部と同様に基礎情報、釈読を加え、さらに内容に応じて、それぞれ検討を加えている。

「第三部 新出土文献から見る教訓書」は、教訓書として考えられている北京大学所蔵漢簡の考察である。第一章『周馴』、第二章『教女』だが、『教女』に関しては女性の教訓書である後漢、班昭（45年?–117年?）の『女誡』との比較を行なっている。

なお、一部、二部、三部に先だって、大部の「序論」がある。第一章「中国新出土文献研究概述」、第二章「上博楚簡における誤写の可能性について——『武王踐祚』『鄭子家喪』を中心に」、第三章「中国古代における王の呼称——上博楚簡『鄭子家喪』を中心として」である。

第一章では、「第一節 新出土文献の発見と中国思想史研究」で、新出土文献の発見が中国思想史研究にどのような影響を与えたかが語られる。「春秋時代後期、儒家・墨家・道家・兵家などの思想家が誕生した。続く戦国時代は諸子百家の黄金期であり、様々な思想が生まれ、中国思想史上、最も多彩な論争が繰り広げられた。しかし、それも秦の始皇帝の天下統一、焚書・思想統制によって終焉を迎える。漢代になると、今文と古文というテキストに関する論争が繰り広げられた」（11頁）は、まさにその通りなのだが、この部分があとで詳しく展開していく。

ここでは「秦の始皇帝の天下統一、焚書・思想統制」とのみ記し、「言語」や「文字」のことは省略されている。しかし、周知のように始皇帝は文字統一を行なっている。統一前の戦国の七雄の時代は、「諸侯は政につとめ、周の王朝に統制されなくなり、……分かれて七国となり、田んぼは畝を異にし、車は軌道を異にし、律令は法を異にし、衣冠は制度を異にし、言語は声を異にし、文字は形を異にした」（後漢、許慎『説文解字』叙）という状況であった。

それぞれの諸侯の国で、「言語は声を異にし、文字は形を異にした（言語異声、文字異形）」と発音や字形が異なっていた。現在でも北京と広東では、まるで発音が異なる。また広東語だけの字形「冇（没有＝無い）」もあるため、そういったことは理解しやすいであろう。天下を統一した秦は、諸侯の国ごとに異なっていた字体を秦の小篆に統一したとされる。小篆はやがて簡略化され、速く書くことのできる隸書になっていく。

本書で草野がとりあげる戦国時代の楚文字で書かれた文献でも、諸侯の国が字体を異にしたことは十二分に理解できる。一見して文字が異なるのである。

「漢代になると、今文と古文というテキストに関する論争が繰り広げられた」という部分も吟味すると面白い。「（周）宣王（在位、前827–782）の太史籀が大篆十五編を著わすと、古文とは、いくぶん異なっていた。孔子が六経を書き、左丘明が春秋の伝を述べたのは、みな古文をもちいた。その意は理解し説明できた」（前掲『説文解字』叙）とあり、古文と大篆の区別が記されている。この古

文という言い方に対して、漢代では「今使っている文字」という意味で「今文」という名称ができた。

前漢の宣帝（在位、前73年－前49年）のころ、『春秋公羊伝』（今文）の公羊学派に対抗するために『春秋穀梁伝』（今文）が取り上げられた。どちらも政治と結びついていた。その後、それらを凌駕しようとして書かれた『春秋左氏伝』（古文）があらわれた。その推進者が劉歆であった。劉歆（?-23年）は漢の禪譲を受けて「新」を興した王莽（前45-23、在位9-23）のブレインである。もちろん禪譲とは名ばかりで実際は篡奪であった。

今文・古文はたんにテキストの文字が新しい古いというだけでなく、背後には政治的対立があったのである。

「隸書」は今文である。ふつう篆書に隸属する文字という意味だとされる。しかし、山元宣宏(2008)は、「許慎が『説文解字』叙で隸書の解説に「四に曰く佐書、即ち秦の隸書。」と記述したのは、労役刑である「隸臣」を意識した使い分けであった。……そこで漢代の古文学派は、当時名称のなかった今文（或いは佐書）に蔑称を与える為の拠りどころとしたのが、「隸臣」であったのではないかと考えた」と述べている。要するに古文学派が今文学派を貶めるために、今文を隸書と呼んだのだという。許慎は古文学派である。

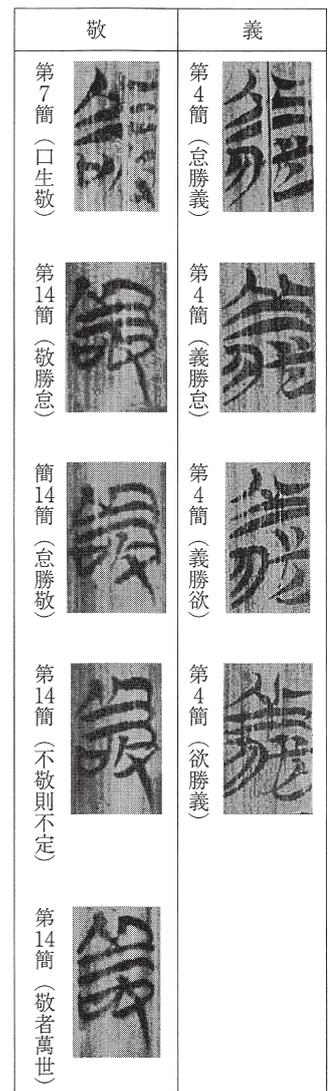
草野が本書で扱っている資料は大きくとらえれば古文である。古文の『春秋左氏伝』僖公二十七年伝につながる内容が上海楚簡『成王為城濮之行』にみえる。『春秋左氏伝』では「楚子」だが、楚簡では「成王」となっており、楚の立場で書かれていることがわかる。古文の中での差異が興味ぶかい。

第二章の「誤写の可能性」というのは、丁寧に楚簡を解読していく過程から生まれたものである。字形が似ることから、筆写を重ねる際、誤写が起こったのではないかという指摘である。上博楚簡『武王踐祚』では「義」と「敬」が似ている。また「志」と「忘」も似ている。上博楚簡『鄭子家喪』では「而」と「天」が似ている。それらの字形の写真をすべて掲げた上で、ある箇所では、誤写ではないかと指摘している。

「図1・図2の用例は、「義」と「敬」とが極めて似た字形であることを証明しており、これらは互いに誤写されやすい字形であると言えることができる。従って、上博楚簡『武王踐祚』の「怠勝義」「義勝怠」の「義」は、「敬」を誤写したものである可能性が高いと考えられる。すなわち、この一文はやはり、現行本『大戴礼記』武王踐祚篇の記述（「敬勝怠者強、怠勝敬者亡」）や、上博楚簡『武王踐祚』第14簡の記述（「敬勝怠則吉、怠勝敬則滅」）と同様に、「敬」と「怠」「義」と「欲」が対応しているのである」（56頁）と記す。

「義」と「敬」は隸書の段階で全く異なり、現在の文字も全く似ていない。しかし、「義」は「羊+我」（白川静『字通』）、「敬」は「羊頭の人……」（同左）であり、本来、構成部分に「羊」を含んでいる。李斯の會稽碑（篆書）の「敬」にも羊の部分を残した書体（図

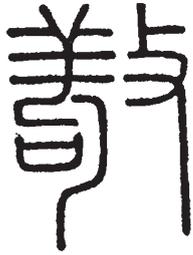
序 論 56



〔図1〕 上博楚簡『武王踐祚』における「義」と「敬」

(図版 A)

版 B) があるが、唐の李陽冰（図版 C）、元の趙孟頫（図版 D）の篆書はさらに上博楚簡に似る。宋代に金石文の研究が盛んになったが、そのころ、出現した春秋あたりの青銅器の金文の影響を受けたのだろう。温故知新と言ってもよいだろう。



(図版 B)



(図版 C)



(図版 D)

武王踐祚の1～11簡の「怠勝義則喪、義勝怠則長」は、11～15簡では「敬勝怠則吉、怠勝敬則減」である。これだけでも校勘の材料となる。これに加えて、『大戴礼記』の文例「敬勝怠者強、怠勝敬者亡」とも比べている。その結果、「義」は「敬」を誤写したもので、「怠勝義則喪、義勝怠則長」は「怠勝敬則喪、敬勝怠則長」であるべきだと、見事に考証している。

このことは何重にも興味ぶかい。ふつう出土資料の文字を精確に判読できず、誤読して間違えることが多い。ここはそうではない。原本が誤写しているというのである。またその誤写を上海楚簡よりも後世のものと考えられている『大戴礼記』の文例で論証しているのも興味ぶかい。一般的には後世の文献の誤りを、古い時代の文献によって修正することの方が多い。ここでは武王踐祚の別の簡所と『大戴礼記』の二つをあわせてうえて論証しているので説得力がある。文意を考えても、「怠慢不敬」という言い方があり、「怠」と「敬」が対義語であるとわかる。

同様に第二節では、「志」と「忘」、第三節では、「而」と「天」の誤写について論じている。

ヨーロッパの中世では、写本 manuscript の際に、身を淨めた上で、一切、喋らず、集中して行ない、誤字だと思っても勝手に書き直さない、といったルールがあったようだ。

中国の写本がどのようなものであったのかはわからないが、「劃痕」のように、「錯簡」（竹簡の誤排列）や「脱簡」（竹簡が抜けおちること）を防ぐ方法が考えられている。「劃痕」とは、草野の専門用語一覽（viii 頁）の説明によれば、「竹簡の背面に斜めに刻まれたひっかき傷状の線。一般的に、数枚の竹簡にわたってつけられており、竹簡の誤排列を防ぐために加えられたものであると考えられる。そのため、編聯する際の有力な手がかりとなる」のである。そのように注意しても誤りはおこるのであろう。

第三章は、「中国古代における王の呼称——上博楚簡『鄭子家喪』を中心として」で、第一節で上博楚簡『鄭子家喪』の「王」と「君王」、第二節で上博楚簡の「君王」、第三節で、伝世文献の「君王」と、「君王」という呼称に関して考察している。

「戦国の七雄が台頭するようになった戦国時代以降、「君王」と呼ぶ用例が各地で見られるようになるのである。おそらく南方の長江流域の国々で伝統的に使用されていた「君王」の呼称が中原にも流入したのであろう。周王室の衰退は、こうした呼称からも感じ取ることができる」（78 頁）と記される。呼称の差異によって、当時の政治の状況まで、推察できるということであろう。

全体のまとめとして、「これらの文献が楚の地で発見されたことの意味である。これまで思想の中心はいわゆる「中原」であるとされてきたが、中原より遙か南の楚の地域においても、すでに多様な文献が存在し、多様な理論が展開されていたのである。また、これらの新出土文献の発見によって、少なくとも戦国中期にはこれらの文献が広い範囲で流布していたこと、楚の地域においても思想的に興味深い文献がいくつも存在することが明らかとなった」（471頁）と記される。

われわれは知らずしらずのうちに文献の作者や主人公の視点で物事を見てしまいがちである。そして楚に対してはどうしても、中原の国ではない、という画一的な視点で見ってしまう。しかしながら、楚の地で発掘された文献は、まさに楚人の立場で、楚国によりそって物事を見ているのである。そのことは、われわれの硬直化した思考を解きほぐしてくれるかも知れない。どの地域で出土した資料なのかという地域性もまた出土資料の味わいである。

なお、実はこの書の冒頭に専門用語一覧がある。凡例よりも前に掲げられている。これらは出土資料を読む際に必要な専門用語の解説である。そこには中国哲学や中国文学で伝統的な文章読解の訓練を受けてきたものが習得した知識とは異なる用語も多い。

いくつか紹介してみよう。「竹黄・竹青・綴合・合文・重文・編痕・留白・契口・墨線・劃線・墨釘・墨鉤・墨節……」。「竹青」を見て、『聊齋志異』や太宰治しか思い浮かばなければ、この書籍を書架に並べるべきである。

#### 参考文献

山元宣宏（2008）「秦漢時代の書体の諸相」京都大学大学院人間・環境学研究科博士学位論文（<http://hdl.handle.net/2433/136480>）.